2021.8.29(日)（聖日礼拝）　　布目麻矢主事

＜　一粒の麦のいのち　＞

ヨハネ 12:20-26

イエスが十字架にかけられる週の日曜日、エルサレム中のユダヤ人が、「イスラエルの王！」と熱狂してイエスを迎えたあとのこと。

祭りで礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシャ人が何人かいた。
この人たちは、…ピリポのところに来て、「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです。」と頼んだ。　（ヨハネ 12:20-21）

ピリポはアンデレに話し、二人は相談した上でイエスにこのことを話しに行った。
随分と回りくどい…。イエスが、ユダヤ人のところ以外には遣わされていないと明言されていたから。
「わたしは、イスラエルの家（ユダヤ人）の失われた羊以外のところには遣わされていません。」
（マタイ 15:24）

ギリシャ人の求めに答えて語られたことば

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。
しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」　（ヨハネ 12:24）

「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、多くの実りを得ることはできないけれど、あなたがたにその豊かな実りが与えられる。わたしがその一粒の麦となって死ぬのだから。」
→　ユダヤ人のためだけではない、ギリシャ人を始めとする異邦人にも。つまり、すべての人のために一粒の麦となって死なれることを指している。

ヨハネ 12:24 のことばは、辞書を見ると、西洋のことわざとして紹介されていて、「誰かのための自己犠牲の尊さを教える教え」であったり、「そうやって自分を犠牲にする人たちのこと」を表わすことばだけれど、<u>この一粒の麦は何よりも、イエス・キリストのこと</u>。
私たちは、この一粒の麦からの豊かな実り。

「人の子が栄光を受ける時が来ました。」　（ヨハネ 12:23）

栄光を受ける時？

檜舞台、ご自身の輝かしい時、誇らしい時、喜びに満ち溢れる時…。

苦難のしもべである救い主についての預言　イザヤ書 53 章に十字架の苦しみを思い起こさせる言葉が続いた後、後半にこう語られる。

「彼は自分のたましいの激しい苦しみのあとを見て、満足する。…」　（イザヤ 53:11）

「自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世で自分のいのちを憎む者は、それを保って永遠のいのちに至ります。」　（ヨハネ 12:25）

24 節の言い換え。イエス様がまず、このように十字架に向かって生きられた。

ご自分のいのちを大切にしつつ、そのいのちよりも、いのちを与えたお方を大切にした。

一粒の麦イエス様の実りとなった人々の生きる道

「わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。
わたしがいるところに、わたしに仕える者もいることになります。」（ヨハネ 12:26）

イエス様を信じて、従うときに、その人は一粒の麦イエス・キリストの豊かな実りとなり、その麦粒と同じいのちを生きる。

イエス様に従うとき、私たちはイエスのおられるところにいる。

そして、父なる神が御子イエスを重んじられたように、主イエスに仕える者を神の子として重んじてくださる。

・出雲の旧家の娘・香代

・中村哲

・斎藤宗次郎（宮沢賢治の「雨にも負けず」のモデルになったクリスチャン）

重要なのは、私たちのために一粒の麦となられたイエス・キリスト。
この方を信じ、この一粒の麦のいのちをいただいて神の豊かな実りとされる。
自分のいのちの主人となる必要はない。なってはならない。
イエス・キリストに従いつつ、頂いたいのちを生きること。
そこで、私も永遠のいのちの実りをもたらす一粒の麦として生かされる。